

我執か悲哀か

——ラフカディオ・ハーン「鏡と鐘と」について

Selfish Soul or Pathos of a Woman: On Lafcadio Hearn's "Of a Mirror and a Bell"

川澄 亜岐子

KAWASUMI, Akiko

1. 「鏡と鐘と」——個人と社会の関係を問う

ラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn, 1850-1904)の「鏡と鐘と」(“Of a Mirror and a Bell”)は『怪談』(*Kwaidan*, 1904)の一篇として発表された再話作品で¹、無間の鐘として知られる伝説とそれに端を発する二つの話から成る。以下に、その内容をハーンのテキストに沿って確認する。

第一の話は、無間の鐘の伝説である。「八世紀前」のこと²、遠江国の無間山にある寺で鐘が造られることになり、鏡の材料にするために鏡の寄付が募られた。無間山に暮らす百姓の妻も、鏡を寄付した一人である。彼女は母親から鏡を受け継ぎ、嫁いだ後も、結婚前の家族との思い出の品として、大切にしてきたのだった。その後、彼女の鏡は鑄造のために鑄物場に運ばれるが、何度火にかけても一向に融ける気配がない。職人たちは、その理由を持ち主が真心から鏡を寄付しなかったせいだと考えた。鏡の噂は村にも伝えられ、これを苦に病んだ百姓の妻は、寺の鐘を撞いて割った者には大金を授けるといふ内容の遺書を残して入水自殺する。その後、鏡は融けて、寺には立派な鐘が奉納された。ところが、寺に鐘が吊るされると、彼女の遺言の内容を信じた人びとが寺にやって来て、昼夜を問わずに盛んに鐘を撞いた。これに悩んだ僧侶たちは、鐘を沼に沈めた。

第二の話は梅ヶ枝という別の女性に関する伝説で、無間山の伝説を前提としている。梅ヶ枝と梶原景季が旅をしていた時、景季が経済的に苦境に立たされたことがあった。この時、梅ヶ枝は無間の鐘の伝説を思い出し、鐘に見立てた水盤を打ち鳴らして大声で金を求めた。すると、事情を知った宿の客から金が与えられた。

第三の話もまた、無間の鐘の伝説にあやかろうとした放蕩者の話である。彼は無間山にほど近い大井川のほとりに暮らす百姓だったが、道楽をして財産を浪費してしまった。そこで、彼は自宅の庭で泥の鐘を作り、それを叩いて金を求めた。すると、地中から一人の女性が現れて、百姓に水差しを与えて消えた。百姓が妻とともに水差しのふたを開きかけたところで語り手が介入し、「これ以上はお話しできません」という言葉で物語を閉じる。

1 以下、ハーンの作品の書誌情報は、次の文献を参照する。P. D. and Ione Perkins, *Lafcadio Hearn a Bibliography of His Writings* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1934).

2 Lafcadio Hearn, “Of a Mirror and a Bell,” *The Writings of Lafcadio Hearn* vol. 11 (Kyoto: Rinsen Book, 1973), p. 191. 以下、ハーンの作品の引用は同作品集による。作品集の表題はWLHと略記し、巻数とともに示す。「鏡と鐘と」が発表された1904年を語り手の現在として想定すると、物語世界の現在として設定される時間は1100年代初頭、すなわち平安時代末期であると考えられる。

3 「博多にて」の初出は『アトランティック・マンズリー』誌(*The Atlantic Monthly*)の1894年10月号である。

4 平川祐弘『ラフカディオ・ハーン——植民地化・キリスト教化・文明開化』(ミネルヴァ書房、2004年)、320頁。

5 三成清香「再話の中の女たち——『夜窓鬼談』から「鏡と鐘と」*Of A Mirror And A Bell*へ」(日中言語文化教育推進会『日中言語文化』第13号、2020年)、38頁、43頁。

6 三成「再話の中の女たち」、43頁。

7 林淑丹『小泉八雲・濫澤龍彦と『夜窓鬼談』——交響する幻想空間』(翰林書房、2019年)、66-67頁。

8 布村弘は、「鏡と鐘と」は「無間の鐘」伝説の紹介や、人が死の直前に念ずる力の不思議な実現を「なぞらえる」という語を持つ魔術的宗教的な意味の分析で解き明かすことに過半を当てている。「策略」と通じる主題の短篇に仕立てている」と述べる(布村弘「解説」、小泉八雲／平川祐弘編訳『怪談・奇談』講談社、1990年、355頁)。また、ポール・マレイは両作品に共通する主題に言及していないが、「策略」には「ぞっとするようなユーモア」が、また「鏡と鐘と」には「いたずら好きなラフカディオらしいユーモア」が認められるとして、両者に「ユーモア」の要素を認めている(ポール・マレイ／村井文夫訳『ファンタスティック・ジャーニー——ラフカディオ・ハーンの生涯と作品』恒文社、2000年、493-494頁)。

先行研究では、「博多にて」(“At Hakata” in *Out of the East*, 1895) やそこに引用される「松山鏡」という伝説³、また「鏡の乙女」(“The Mirror Maiden” in *The Romance of the Milky Way*, 1905) など、鏡に関するほかの作品と合わせて、「鏡と鐘と」は「ハーンの鏡と霊の関係に対する持続した関心を示すもの」と位置づけられてきた⁴。「鏡と鐘と」には冒頭で「博多にて」を想起させる語りが挿入されていることから、「鏡と鐘と」は「博多にて」を意識して書かれたテキストであるといえるだろう。この点については、後で詳しく述べる。

また、女性像の観点からは、「鏡と鐘と」で無間山の鐘の伝説の発端となった百姓の妻について、「あくまでも鏡に執着せざるを得なかった健気な日本女性」という特徴が指摘され、「ハーンの理想的な女性像の反映と母親への思慕」という解釈が導き出される⁵。これはまた、女性の社会進出が進む19世紀のアメリカ社会に対するアンチ・テーゼとして描かれたことも示唆されている⁶。鏡に対する彼女の「執着」について、別の論考では、ハーンの再話が彼女の鏡に対する愛着を「我執」や「執着」と表現したことは、原話にある「後悔」という表現よりも「深刻な状態」であるという指摘に続けて、再話が彼女の自殺の理由に「恥」だけでなく「恨み」を加えることは、「我執」「執念」と呼んでいることが述べられる⁷。

このほか、「鏡と鐘と」は「人が死の直前に念ずる力」という主題において、「策略」(“Diplomacy” in *Kwaidan*) という別の作品との関連が示唆されている⁸。たしかに、「鏡と鐘と」は、無間の鐘の伝説で百姓の妻が自死する理由となった怒りの感情が、続く二編の伝説に通底する前提として引き継がれていく。ここには、強烈な感情が死と結びついた時に超自然的な力が引き起こされると信じ、畏怖の対象とする語り手の態度が垣間見られる。

以上を踏まえたうえで、本稿では、「鏡と鐘と」の中で社会的な利益が個人の幸福に優先される仕組みがどのように語られるのかを、無間の鐘の伝説を中心に考察する。あらすじで確認したように、無間の鐘の伝説では、融けない鏡があるという噂が村に広まった結果、鏡を寄付した百姓の妻が自殺する。鏡を寄付したことと、鏡に対する個人的な思い入れの間で揺れる彼女の胸中と、彼女に向けられる共同体の視線のずれを分析することは、ハーンの作品に登場する女性像の多様性を確認することにもなるだろう。その際、「博多にて」や「松山鏡」の伝説を踏まえて「鏡と鐘と」を読むことによって、社会と個人の関係についてのハーンの見解に大きな変化が見られないことを確認し、そのうえで、その見解がどのようにして「鏡と鐘と」の女性像に結び付けられているのかという問題についても考えていきたい。

2.「祈得金」と「鏡と鐘と」——無間の鐘の伝説

2-1. 思い出の鏡

「鏡と鐘と」は、「祈得金」(祈ツテ金ヲ得)という日本語で書かれた話に依っている。「祈得金」は、石川鴻斎(1833-1918)の『夜窓鬼談』上巻に収められている。

石川鴻斎は明治時代の漢文学者で、日本人による漢詩集や漢学書を校訂する編集者としても活動した⁹。『夜窓鬼談』は、鴻斎が諸国をめぐって見聞きした話や日中の古典籍をはじめとするさまざまな文献や書物から集めた話をもとに創作した話をまとめたもので、1889年に上巻が、1894年に下巻が東陽堂から出版された¹⁰。ハーンの旧蔵書には上下巻がともに含まれているため、本稿ではハーンが所有していた版にもとづいて論を進める¹¹。

「鏡と鐘と」と「祈得金」を比較すると、両者に共通する部分に内容上の大きな違いは見られない¹²。だが、全体的な特徴として、ハーンの再話では無間の鐘の伝説に原話よりも多くの分量が割かれている。ここでは、ハーンによる書き換えの特徴を明らかにするために、再話で新たに加筆された箇所を検討することから始めたい。まずは無間の鐘の伝説が原話でどのように語られるのかを確認する。

遠州無間山。古へ巨刹(キョセツ)有り。寺僧施ヲ募(ツノ)ツテ鐘ヲ鑄ル。一民家の婦。愛スル所ロノ妝鏡(カ、ミ)ヲ喜捨(キシヤ)ス。後意甚ダ悋(オシ)ム。鐘成(ナ)ルニ及テ鏡融化(イウクワ)セズ。婦之ヲ恥(ハ)ヂ終ニ水ニ没(ボツ)シテ死ス。没スルニ臨(ノゾ)ンデ誓(チカ)ツテ曰ク。若シ此[ノ]鐘ヲ撞破スル者有ラハ。授クルニ万金ヲ以テセン。¹³

原話は、「遠州無間山」の「巨刹」で鐘を新調することになったという説明に続けて、「一民家の婦」の事情が語られる。彼女は「愛スル所ロノ妝鏡」を「喜捨」するも、これを「甚ダ悋ム」。そして、鏡が鑄造の過程で融けないことを知ると、「之ヲ恥ヂ、鐘を壊した者には「万金」を授けると「誓ツテ」自殺する。

原話において、無間山の鐘の伝説は内容の大枠しか語られず、原話全体に占める割合も少ない。伝説はこれ以降の話の前提として置かれているのであり、その要点は鐘やその代替物を叩いて金が出るという信仰の由来を示すことである。

では、ハーンの再話において、この伝説はどのように語られるのだろうか。再話では、「寺僧たちは、鏡の材料に使うため、檀家の女性たち(“the women of their parish”)に古い銅鏡(“old bronze mirrors”)を寄付して支援してくれるように頼んだ」という事情に

9 石川鴻斎の生涯については、長澤孝三編『改訂増補 漢文学者総覧』(長澤規矩也監修、汲古書院、2011年)、関儀一郎・関義直編『近世漢学者伝記著作大事典』(琳琅閣書店、井上書店、1943年;第3版、1971年)に項目が立てられているほか、ロバート・キャンベルによる論考がある(ロバート・キャンベル「在野十年代の視程—儒者・石川鴻斎年譜稿抄—」、国文学研究資料館編『幕末・明治期の国文学 明治開化期と文学』臨川書店、1998年、189-211頁;ロバート・キャンベル「『夜窓鬼談』執筆の前後」、池澤一郎ほか校注『漢文小説集』新日本古典文学大系 明治篇3、岩波書店、2005年、555-567頁)。

10 高柴慎治「『夜窓鬼談』の世界」(静岡県立大学国際関係学部『テキストとしての日本 (外)と(内)の物語』篠原印刷所、2001年)、12頁。

11 ハーンが所有していたのは、上巻が1893年に刊行された再版、下巻が1894年の版である(『富山大学附属図書館所蔵 ヘルン(小泉八雲)文庫目録』テキスト版、2019年、書架番号[2307]、[2308])。これらは、富山大学のリポジトリでPDFファイルが公開されている。(https://toyama.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=13251&item_no=1&page_id=32&block_id=36 2021年12月14日参照)。「鏡と鐘と」のほか、「お貞のはなし」、「宿世の恋」、「果心居士」も『夜窓鬼談』に所収された作品をもとに書かれた再話作品である。『夜窓鬼談』を原拠とするハーンの再話作品を論じた主な研究には、平川祐弘『オリエンタルな夢—小泉八雲と霊の世界』(筑摩書房、1996年)、遠田勝「転生する女たち—鴻斎・ハーン・漱石再論」(平川祐弘・牧野陽子編『講座小泉八雲II ハーンの文学世

界』新曜社、2009年、102-126頁）、前述の林淑丹『小泉八雲・澁澤龍彦と『夜窓鬼談』』などがある。

12 原話の「祈得金」には、再話と共通する三つの話の後に、もう一つ別の話が置かれている。これは、中国の清代に編まれた怪異小説集である『聊齋志異』に所収される「雨銭」という話で、秀才が欲得の心を狐にたしなめられるという内容である。原話では、再話と共通する百姓の話に続いて、「此れ相似タル事」として「雨銭」の要約が紹介されることから、原話の主題は欲得の心に対する戒めであることがわかる。この主題は、ハーンの再話においても百姓の話に認められるが、再話では「雨銭」の部分が省略されることによって、欲得の心に対する戒めという主題は原話ほど強くは打ち出されていない。むしろ再話では、無間山の鐘の伝説が原話から大幅に膨らまされており、テキストの主題も無間山の鐘の伝説の主題に求めることができるように思われる。なお、林淑丹は「雨銭」から「祈得金」を経て「鏡と鐘」とに至る系譜を、「東アジアにおける怪談文学の援用の事例」としている（林淑丹『小泉八雲・澁澤龍彦と『夜窓鬼談』』、68頁）。

13 石川鴻齋「祈得金」、『夜窓鬼談』上巻（東陽堂、1889年；1893年再版）、37頁。原文は訓読文で表記されているが、本稿では小泉八雲『怪談・奇談』（374-376頁）を参考にして書き下し文で引用する。また、白文に添えられた読み仮名（傍訓）は丸括弧に入れて示し、『怪談・奇談』で追加されたと思われる箇所は角括弧で示した。

14 Hearn, *WLH* vol. 11, p. 191.

15 『新潮日本語漢字辞典』（新潮社、2007年）、「恪」および「惜」の項。両者の使い分けについて、『大字源』では「恪」を

続けて、中心人物となる女性のことが次のように語られる。

There was at that time a young woman, a farmer's wife, living at Mugenyama, who presented her mirror to the temple, to be used for bell-metal. But afterwards she much regretted her mirror.¹⁴

再話において、百姓の妻は僧侶たちが鏡の寄付を募った檀家の女性の一人とされる。彼女は「無間山に暮らす、百姓の若い妻」として設定されるが、これは家業や年齢の情報が加えられた点で、原話における「一民家の婦」よりも詳細な設定になっている。

彼女もまた、原話の「一民家の婦」と同様に鏡を寄付したことを後悔するが、それを示す言葉の使い方には微妙な違いが見られる。まず原話では、「一民家の婦」の後悔は「恪ム」という言葉によって表されている。「恪」には「物を差し出すことを嫌がる。けち」という意味があり、ある状態が損なわれたり、失われたりすることを残念に思う気持ちを表わす「惜」と区別される¹⁵。一方、再話に用いられる“regret”は、むしろ「惜」に近く、人やものを失った悲しみに焦点を当てる言葉である¹⁶。従って、原話で「一民家の婦」が鏡を「恪ム」だの、鏡の金銭的な価値を惜しんだり、鏡を失って損をしたと思ったりする吝嗇な性質によるのに対して、再話の百姓の妻が鏡を惜しむ（“regret”）のは、鏡に対する喪失感によるものである。彼女は鏡を手放したことで自体を嘆き悲しんでいるのであり、できることならばもう一度、鏡を手に取りたいという切実な思いを抱いているのである。

ではなぜ、再話における百姓の妻は、鏡をこれほど惜しむのだろうか。その理由は、次のように説明される。これは原話にはなく、再話で新たに書き加えられた箇所である。

She remembered things that her mother had told her about it; and she remembered that it had belonged, not only to her mother but to her mother's mother and grandmother; and she remembered some happy smiles which it had reflected.¹⁷

“remember”は、過去や記憶に関連の深い言葉である。それが“she remembered”という形で三度も繰り返されることで、過去に対する彼女の思い入れが強化され、重層化されていく。それぞれの“remembered”からは、百姓の妻が母親から聞いた鏡の話や、鏡がかつて曾祖母のものであり、祖母、母へと受け継がれたものであること、そして、鏡が映し出してきた「いくつかの笑顔」の記憶が導

き出される。これらの記憶は、いずれも彼女が結婚する前の家庭や家族と結びついたものである。百姓の妻は、鏡やそれまつわる話を通じて、家族とのつながりを意識していたように思われる。また、家族の記憶は笑顔に象徴される幸福な思い出として、彼女の中に蓄積されていたようである。

これらを踏まえると、彼女が鏡にこだわる理由とは、結婚前の家族との思い出を大切に思う気持ちにほかならない。逆に言えば、彼女は鏡を手放したことで、家族との思い出を失ったように感じたのではないだろうか。“regret”に内包される彼女の喪失感や心残りとは、家族の間で大切に守り伝えられてきた鏡を失ったことによる喪失感とともに、家族と自分との結びつきが断たれてしまったことを悔しく思う気持ちであると考えられる。

2-2.「利己的な心」

ハーンの再話では、百姓の妻にとって、鏡が家族との思い出の品であるという設定が追加された。その結果、彼女が寄付した鏡を惜しむのは、家族との思い出を手放したことに対する後悔であるという背景が示された。しかし、共同体の利益という文脈に置かれると、彼女が思い出の品を大切に思う気持ちは共同体の利益と衝突することになる。このような視点の変化は、百姓の妻が後悔を募らせ、その後悔によって追い詰められていく過程を通じて描かれる。

まずは、百姓の妻が後悔を募らせる場面を考察する。「彼女は寺に行くたびに」(“whenever she went to the temple”), 境内に積み上げられた鏡の中に「松竹梅」の模様が彫られた自分の鏡を見つけて、居ても立ってもいられない心地になる。

She longed for some chance to steal the mirror, and hide it — that she might thereafter treasure it always. But the chance did not come; and she became very unhappy — felt as if she had foolishly given away a part of her life. She thought about the old saying that a mirror is the Soul of a Woman (a saying mystically expressed, by the Chinese character for Soul, upon the backs of many bronze mirrors), and she feared that it was true in weirder ways than she had before imagined. But she could not dare to speak of her pain to anybody.¹⁸

鏡を手放したことに対する百姓の妻の後悔は、ふたたび自分の手もとに鏡を置きたいという欲求として具体化し、それが叶わないとなると、彼女は鏡を自分の生命にも匹敵する大問題であると考えて

「物惜しみする。けち」とし、「惜」を「心におしく思う。ひろく用いる。」として、「惜」が対象とするのが物欲や金銭欲に限定されることが説明される(『大字源』、角川書店、1992年、2148頁)。

16 *The Oxford English Dictionary*では、“regret”の項に次の語義が掲載されている。“In early use: to express sorrow at the loss of (a person or thing); to mourn, lament (obsolete). Later: to feel sorrow for such a loss; to think of or remember (something or someone lost or absent) with distress or longing.” (<https://www.oed-com.utokyo.idm.oclc.org/view/Entry/161392?rskey=FBOTwB&result=2&isAdvanced=false#eid> 2022年2月25日参照) また、1989年の第二版では、“regret”の他動詞の用法の中に“to feel (or express) sorrow for the loss of (a person or thing)”とある。これらはいずれも人や物を失ったことを嘆き、悲しむことを説明するもので、このことから喪失感が“regret”の中心的な意味であることがわかる(*The Oxford English Dictionary* vol. 13, second edition, Oxford: Clarendon Press, 1989)。

17 Hearn, *WLH* vol. 11, p. 191.

18 Hearn, *WLH* vol. 11, p. 192.

19 「鏡と鐘と」には以下のような文章がある。"Of course, if she could have offered the priests a certain sum of money in place of the mirror, she could have asked them to give back her heirloom." (Hearn, *WLH* vol. 11, p. 191) 鏡が家族にとって大切なものであることは、"her heirloom"という言葉によっても表されている。また、ここで仮定法が使われていることも、彼女の状況を効果的に伝える工夫といえる。仮定法には現実と相反する状況を表わす働きがあることから、ここでは彼女が寄付金を用意することができない状況にあることがわかる。

20 この諺は、女性にとって鏡が大切であることを意味する言葉で、「刀は武士の魂」とともに使われることが多い。由来は不明だが、18-19世紀の浄瑠璃や歌舞伎に用例が見られる(『日本国語大辞典』オンライン版、「鏡は女の魂」の項、<https://japanknowledge.com.utokyo.idm.oclc.org/lib/display/?kw=%E9%8F%A1%E3%81%AF%E5%A5%B3%E3%81%AE%E9%AD%82&lid=200200c1c124S5polr1M> 2022年3月29日参照)。「鏡は女の魂」は、ハーンよりも20年早い1870年に、福井藩のお雇い外国人教師として来日したグリフィス(William Elliot Griffis, 1843-1928)の『皇国』(*The Mikado's Empire*, 1876)にも記録されている。ここでグリフィスは、吉原の女性たちが身づくろいする様子を見て、「日本人の男性が「鏡は女の魂」と皮肉る」と報告している(山下英一訳『明治日本体験記』平凡社、1984年、52頁)。

21 "a part of one's life"は「人生の一部」と訳されることが多い。「鏡と鐘と」においても、彼女が鏡を失ったことを後悔するのは、家族との思い出を失ったように感じたからであり、その意味で"a part of her life"は「彼女の人生の一部」として解釈することができる。

思いつめていく。この場面では、反復や継続の意味をもつ"whenever"や"longed for"が使われていることから、百姓の妻の葛藤は一定の期間にわたって、幾度も繰り返されたことがわかる。実は、いくらかの寄付金を払えば鏡を返してもらうことができるのだが、彼女にはその金を工面することができない¹⁹。寄付金を払うことができないから、彼女は「盗んだり」("steal")、「隠したり」("hide")してまで鏡を取り戻したいと考えるのである。寄付金が払えないほど貧しいという設定もまた、原話にはなく、再話で新たに書き加えられた要素である。

その後は、"very unhappy"や"foolishly"という言葉が表すように、彼女の葛藤は不満やみずからの行為をばかばかしく思う気持ちへと転じていく。彼女の葛藤の原因が拡大される背景には、やはり彼女が家族から受け継いだ鏡を寄付してしまったことにあるだろうが、その根底には、金銭的な余裕がないばかりに大切な鏡を失わなければならなかったことへの苛立ちが込められていると思われる。そしてこの苛立ちは、彼女が鏡をみずからの命と見なすようにさえなるほど、彼女を追い詰めていく。

引用箇所半ばから後半にかけて、百姓の妻がこのように考えることの背景に、ある諺の影響があったことが説明される。それは「鏡は女の魂」("a mirror is the Soul of a Woman")という諺である²⁰。この諺は、女性にとって鏡が大切であることを述べたものだが、百姓の妻はこれを文字通りの意味として、すなわち鏡と自分の命を重ねて理解していた節がある。鏡を取り戻すことができないとわかった時、百姓の妻がこの諺を思い出し、「愚かしくも命の一部を投げうってしまったかのように感じた」("[she] felt as if she had foolishly given away a part of her life")ことは、彼女にとって鏡とそれが象徴する家族との思い出がどのような意味を持っていたのかを端的に表している。すなわち、「命の一部」と思えるほどに、鏡やその思い出は彼女にとって大切なものだったのである²¹。加えて、彼女が鏡を失ったことで、自分の「命の一部」までも失ったように感じていることは、のちに彼女が自殺することの伏線ともなっている。

次に、彼女の鏡が鑄造される場面を引用して、鏡に対する彼女の愛着が、村社会の中でどのように受け止められたのかを確認する。

Now, when all the mirrors contributed for the Mugenya bell had been sent to the foundry, the bell-founders discovered that there was one mirror among them which would not melt. Again and again they tried to melt it; but it resisted all their efforts. Evidently the woman who had given that mirror to the temple must have regretted the giving. She had not presented

her offering with all her heart; and therefore her selfish soul, remaining attached to the mirror, kept it hard and cold in the midst of the furnace.²²

鏡が融けないことで、鏡の持ち主であった百姓の妻に批判の矛先が向けられる。職人たちは彼女の事情を考えることなく、鏡が融けない理由を持ち主の心根に求めようとする。度重なる鑄造にもかかわらず、一向に融けない鏡の硬さは、“which would not melt”、“it resisted all their efforts”などの表現によって強調されている。鏡の硬さは持ち主の頑固な心根の現れと見なされ、「利己心」(“her selfish soul”)や「鏡に執着している」(“remaining attached to the mirror”)などと表現される。さらに、“evidently”という副詞や、完了形で示される推量(“must have regretted”)、および事実(“had not presented”)の表現などによって、彼女の内面が断定的に語られる。彼女の内面は「硬さと冷たさ」(“hard and cold”)という融けない鏡の性質にも重ねられ、共同体の利益に反するものとして描かれている。

次に見るのは、百姓の妻が自殺する場面である。融けない鏡の話が村に伝わり、それが自分のものだと思った時、彼女は噂話をどのように受け止めたのだろうか。

Of course everybody heard of the matter, and everybody soon knew whose mirror it was that would not melt. And because of this public exposure of her secret fault, the poor woman became very much ashamed and very angry. And as she could not bear the shame, she drowned herself, after having written a farewell letter containing these words:

When I am dead, it will not be difficult to melt the mirror and to cast the bell. But, to the person who breaks that bell by ringing it, great wealth will be given by the ghost of me.²³

自分の寄付した鏡だけが鑄造しても溶けず、その話が村中に知れ渡るとなると、百姓の妻は「大変に恥入り、また激しい怒り」(“very much ashamed and very angry”)を感じた。彼女に怒りや羞恥心を引き起こした原因は「秘密に抱いてきた罪を世間に暴露されたこと」で、ここに彼女の複雑な心境を読みとることができる。彼女は鏡を寄付したことを後悔し、取り戻したいとさえ願っていたが、同時に、そのように思う自分の気持ちに罪悪感を抱いていた。「ひそかな咎」(“her secret fault”)という表現には、世間の規範に反する思いを捨てることができないという彼女の罪悪感が反映されてい

る。しかし、ここでは鏡を“a part of her life”であるとする彼女の認識が彼女自身の自殺の伏線になっていることを強調するために、あえて「命の一部」と訳した。なお、平川祐弘訳「鏡と鐘と」においても、この箇所は「自分自身の命の大切な一部」と訳されている(小泉八雲『怪談・奇談』、43頁)。

22 Hearn, *WLH* vol. 11, p. 192.

23 Hearn, *WLH* vol. 11, p. 193.

24 先行研究では、「博多にて」は作中に引用される「松山鏡」の話とともに、ハーン生命哲学を語るテキストとして読まれてきた(平川祐弘『ラフカディオ・ハーン』、221-254頁;茶谷丹午『ラフカディオ・ハーン』の「博多にて」、金沢大学大学院人間社会環境研究科『人間社会環境研究』第37号、2019年3月、111-122頁)。また、ハーンと「松山鏡」との関連を、ハーンと諸外国の文学との関連から取り上げた論文もある(田中雄次『ラフカディオ・ハーンとドイツ文学——ゲーテの短篇との関連を中心に』、平川祐弘・牧野陽子編『講座小泉八雲II ハーンの文学世界』新曜社、2009年、253-273頁;大貫徹『死者の霊に向き合う作家たち——ハーン、イエイツ、ペケット』、同書、176-194頁)。平川祐弘は、「鏡と鐘と」で百姓の妻が寺の境内に積み上げられた鏡の中に自分の鏡を見つける場面について、「ハーンがかつて博多稱名寺で見た情景の応用だったに違いない」と述べている。なお、稱名寺とは、「博多にて」に描かれる博多の寺の名称である(平川祐弘『ラフカディオ・ハーン』、320頁)。

25 坂東浩司の年表によれば、ハーンが博多を訪れたのは1892年4月、同年7月、1893年4月の計3回である。「博多にて」で話題にされる巨大な大仏は、ハーンが最初の訪問時に見たものであるという(坂東浩司『評述年表ラフカディオ・ハーン伝』英潮社、1998年、369頁)。

26 「博多にて」の第二節に描かれる寺の話は、「鏡と鐘と」でも語り手の言葉として挿入されている。「鏡と鐘と」では「博多にて」の表題は挙げられていないが、語り手は、寺の目的に役立っているために銅鏡の寄付を募り、境内に積み上げておくことがあると述べたうえで、自身の体験として、博多の浄土宗の寺でそのような風景を見たことに言及している(Hearn, *WLH* vol. 11, 191)。このことか

るように思われる。

他方で、百姓の妻は羞恥心とともに「激しい怒り」をも感じている。怒りの原因はテキストに明示されておらず、さまざまな可能性に向けて開かれているが、ここではとくに、彼女と世間との関係の観点から彼女の「激しい怒り」を解釈しておきたい。これまでに、鑄造所の職人たちは、鏡が融けないのは持ち主の心根に問題があると考えた。そして、融けない鏡があることと、その持ち主が誰であるかということが、村人にも共有された。百姓の妻の鏡だけが融けないという噂が広まるのが彼女に与えた衝撃は、「暴露」(“this public exposure”)という強い言葉からうかがわれる。自分や自分の鏡が村の噂の対象となっていると知った時、彼女は「大変な恥」と「激しい怒り」を覚えたのではないだろうか。言い換えれば、百姓の妻が鏡を大切に思う気持ちや事情を想像しようともせず、職人や村人がそれを一方的に利己心や執着心と見なしたことに対する苛立ちが、彼女の怒りの本質なのではないかと思われる。ゆえに、彼女はその怒りを世間に示すために、不思議な内容の遺言を残し、人びとを巻き込んで完成した鐘を巡る騒動を起こそうとしたのではないだろうか。

3.「博多にて」——鏡が持つ「美なるもの」

3-1. 寄付された鏡——「美なるもの」について

「鏡と鐘と」では鏡が百姓の妻にとって家族の思い出を象徴する品として描かれたが、この着想は「鏡と鐘と」よりも10年ほど早く発表された「博多にて」というハーンの別のテキストに遡ることができる²⁴。「博多にて」を「鏡と鐘と」の背景となるテキストとして読み解いた論文は見当たらない。ここではいったん「鏡と鐘と」を離れて、個人と社会の関係および、それを鏡に象徴させるという着想について、「博多にて」とそこに挿入される「松山鏡」の伝説を参照しておきたい。

「博多にて」は、ハーンが博多を訪れた経験をもとに執筆した随筆である²⁵。全四節の構成のうち、第二節と第三節に「鏡と鐘と」と関連する内容が見られる。

「博多にて」の第二節において、ハーンと思われる語り手は博多の町を散策中、通りかかった寺の門越しに境内に置かれた仏像の頭部が目に入り、足を止める。よく見ると、置かれているのは仏像の頭部だけで、辺りには仏頭を支えているものを覆い隠すほど多くの鏡が積み上げられていた²⁶。ハーンは、これらの鏡が「巨大な仏の座像」を造るために、女性たちから寄付されたものであることを説

明したうえで、次のように述べる。

Yet I cannot feel delighted at this display, which, although gratifying the artistic sense with the promise of a noble statue, shocks it still more by ocular evidence of the immense destruction that the project involves. For Japanese metal mirrors (now being superseded by atrocious cheap looking-glasses of Western manufacture) well deserve to be called things of beauty. Nobody unfamiliar with their gracious shapes can feel the charm of the Oriental comparison of the moon to a mirror. One side only is polished. The other is adorned with designs in relief: trees or flowers, birds or animals or insects, landscapes, legends, symbols of good fortune, figures of gods. Such are even the commonest mirrors.²⁷

鏡を集めて仏像を造るという発想は「鏡と鐘と」にも共通するが、「博多にて」には、その発想に対するハーンの否定的な立場がはっきりと示されている。そこでは、仏像を造るために寄せられた多くの鏡が「大量破壊の目に見える証拠」(“ocular evidence of the immense destruction”)と表現され、語り手はその光景が自分を「ぞつとさせる」(“shocks”)として、憤慨する気持ちを隠さない。この憤りの理由は、鏡が失われれば、日本の銅鏡がもつ「美なるもの」(“things of beauty”)も失われるとハーンが考えているためである。この「美なるもの」とは、日本の鏡の「優美な形」(“their gracious shapes”)や、鏡に彫りこまれた模様多様性を指すと考えられる。紹介される模様の中に、「木々や花々、[中略]幸運の象徴」(“trees or flowers, [...] symbols of good fortune”)が含まれていることは、「鏡と鐘と」の鏡が「松竹梅」という「三つの幸運の印」が浮彫りにされた模様であったことを思い起こさせる。

ハーンは日本の鏡の構造を説明しながら、それらが「もっともありふれたもの」(“the commonest mirrors”)であると指摘する。ここで「美なるもの」として「もっともありふれた」日本の鏡が説明されていることから、ハーンのいう「美なるもの」の基準は金銭の多寡や稀少性ではないことがわかる。このことは、「鏡と鐘と」で百姓の妻が鏡を惜しむ理由が、原話の物欲や金銭欲から変更されたことを説明するための手がかりとなる。

では、ハーンが日本の鏡に認めた「美なるもの」とは一体、何なのだろうか。「博多にて」には次のような一節が見られる。

Nor is this the only pathos in the vision of all those

らも、「鏡と鐘と」は「博多にて」を意識して書かれたものであることがわかる。

27 Hearn, *WLH* vol. 7, pp. 58-59.

domestic sacrifices thus exposed to rain and sun and trodden dust of streets. Surely the smiles of bride and babe and mother have been reflected in not a few: some gentle home life must have been imaged in nearly all. But a ghostlier value than memory can give also attaches to Japanese mirrors. An ancient proverb declares, “The Mirror is the Soul of the Woman”—and not merely, as might be supposed, in a figurative sense. For countless legends relate that a mirror feels all the joys or pains of its mistress, and reveals in its dimness or brightness some weird sympathy with her every emotion. Wherefore mirrors were of old employed—and some say are still employed—in those magical rites believed to influence life and death, and were buried with those to whom they belonged.²⁸

ハーンは、持ち主の記憶や心情が重なる場として鏡を理解していたらしい。ここにおいて、鏡は「穏やかな家庭生活」(“some gentle home life”)を象徴するものとして語られる。鏡が「花嫁の笑顔、赤ん坊の笑顔、母親の笑顔」を映すことは、「鏡と鐘と」において、百姓の妻が鏡に映ったいくつもの笑顔を思い出したり、その鏡が彼女の家族の間で守り伝えられたりしてきたものであることと重なる。引用の冒頭で言われる「悲哀」(“pathos”)とは、鏡とともに家族の幸せな思い出が「犠牲」(“sacrifices”)にされること、と言いかえてもよいだろう。そして、ここでもまた、ハーンは「鏡は女の魂」という諺に言及する。「鏡は女主人のあらゆる喜びや苦しみ(“all the joys or pains of its mistress”)を感じてきたのであり、彼女のあらゆる感情に通じる情をその曇りや輝きの中に見せるのである」という説明は、「鏡と鐘と」で百姓の妻が鏡を自分の命の一部であるかのように感じたり、村人たちが鏡には百姓の妻の心情が反映されていると考えたりすることと呼応するものである。

3-2.「松山鏡」——母と娘を結ぶ鏡

ハーンはこのような発想を、どこで得たのだろうか。「博多にて」の第三節には、「松山鏡」という別の物語がハーン自身の要約によって紹介されている。

「松山鏡」は落語や謡曲の演目として知られる話で、類話も含めてさまざまな版がある。その中で、「博多にて」に挿入された「松山鏡」は次のような内容である。

松山に、若い侍が妻と娘と住んでいた。侍はかつて、江戸に転勤したことがあり、その土産として妻に鏡を贈った。妻は鏡を知らな

かったため、自分の顔が鏡に映っても、それが誰なのかわからず、夫にからかわれる。その後、鏡は長い間しまわれていたが、妻が重い病気に罹ったとき、鏡は娘に譲られる。妻は、鏡を覗けば私に会えるから、朝夕に鏡を覗きなさいと娘に言い残して亡くなる。娘は遺言を守って鏡を覗き、そこに映った自分の顔を母親だと思って話しかけていた。ある時、これに気づいた父親が娘から事情を聞き、涙にくれる。

ハーンは、チェンバレンが日本語学習者向けに日本の民話や伝説などを集めた読本である *A Romanized Japanese Reader* と、日本の伝説や童話を外国人向けに英訳した縮緬本シリーズの一冊で、ジェイムズ夫人が翻案した挿絵付きの和綴じ本である *The Matsuyama Mirror* を参考文献として挙げる²⁹。ハーン、チェンバレン、ジェイムズ夫人という三つの英語版「松山鏡」を比較すると、ハーンの要約は主にジェイムズ夫人の版に依りつつ、女性と鏡の関係には独自の解釈を示していることがわかる³⁰。

ハーンが独自の解釈を示した箇所の一つは、侍の妻が鏡を片付けた理由である。ジェイムズ夫人版には、侍の妻が「このような素晴らしい品を日常で使うのは、あまりにもったいない」と考えたという理由と、「幼い娘が鏡を見て、うぬぼれの気持ちを起こすことを恐れた」からという理由が見られる³¹。これに対し、ハーンの要約では、鏡が片付けられたのは「なぜなのか、原作には書かれていない」と断ったうえで、「おそらく、もっともつまらない贈り物でさえ、愛情によって人に見せることがためらわれるほど神聖化されてしまうという単純な理由からだろう」として、夫婦間の愛情を強調する理由に書き換えている³²。

次に、母が遺した鏡を娘が覗く箇所に移ると、ジェイムズ夫人の版では娘が鏡を「長いこと、熱心に見つめていた」(“[she] looked in it long and earnestly”) や、「[母を]喜ばせようと懸命に努めて」(“striving still to please her [the mother]”) などの表現によって、母親の遺言を熱心に実践する娘の姿が描かれる。このような彼女の真面目な様子は、「素直で従順な娘」(“this obedient and dutiful daughter”) という設定に対応するものである³³。これに対して、ハーンの要約には娘の人格に関する記述が見られず、娘は、鏡に映るのは母だという「感覚を抱いて、あるいは日本の原作がもっと穏やかに書いているように、「母に会う気持ちで」(“having the sensation, or, as the Japanese original more tenderly says, ‘having the heart of meeting her mother’”) 鏡を見るということが語られる³⁴。

ハーンは「日本の原作」(“the Japanese original”) という表現を用いているが、彼が要約に用いた“having the heart of meeting her mother”という表現は、チェンバレンの *A Romanized Japanese Reader*

29 Hearn, *WLH* vol. 7, p. 61. ハーンは脚注で、次の二冊を挙げている。Basil Hall Chamberlain, *A Romanized Japanese Reader* in 3 parts (London: Trübner & Co., [1886]); Mrs. T. H. James, *The Matsuyama Mirror* (Japanese Fairy Tale Series, no. 10, Tokyo: T. Hasegawa, [1886]. このうち、チェンバレンによる読本はハーンの前蔵書目録に記載されている(『ヘルン文庫目録』、書架番号[940]-[942])。ジェイムズ夫人の縮緬本は同日録に記載がないが、ハーンはチェンバレンに宛てた書簡の中で、ジェイムズ夫人について問い合わせしており、その際に同書を15回も読んだことを報告していることから、ハーンがジェイムズ夫人版の「松山鏡」を読んだことは確実である。なお、この手紙の冒頭で、ハーンは「鏡と魂について、一篇の随筆——いえ、哲学的ファンタジーの小品——を書こうとしています。とりわけ、魂について書いています」(“I’m trying to write an essay—no, a fantastico-philosophical sketch—about Mirrors and Souls. Especially Souls.”)と述べているが、この随筆は「博多にて」であると推測される。ここに“about Mirrors and Souls. Especially Souls”とあることから、鏡に対するハーンの関心とは、とくに人間の魂との関係についてであつたと考えられる(1894年3月9日付、ハーンからチェンバレンに宛てた書簡、Hearn, *WLH* vol. 16, p. 150)。

30 ジェイムズ夫人こと Kate James (生没年不詳) は、スコットランドに生まれ、明治9(1876)年頃に、お雇い外国人教師として海軍兵学寮に着任した夫とともに来日した。彼女はチェンバレンの勧めで日本の昔話を翻訳するようになり、「松山鏡」のほか、「因幡の白兔」や「文福茶釜」などの縮緬本シリーズを手掛けた(宮尾與男編『対訳日本昔噺集』第2巻、彩流社、2009年、235頁)。

31 Mrs. James, *The Matsuyama Mirror*, [npg]. 平川祐弘は妻のこのような人物像を「さかしらさ」や「近代的自意識」という言葉で特徴づけ、その背景にジェイムズ夫人の「ヴィクトリア朝英国の女性らしい、倫理的」な配慮があったと述べる(平川「ラフカディオ・ハーン」、234頁および243頁)。

32 Hearn, *WLH* vol. 7, p. 62.

33 Mrs. James, *The Matsuyama Mirror*, [npg].

34 Hearn, *WLH* vol. 7, pp. 62-63.

35 Chamberlain, *A Romanized Japanese Reader* pt. 3—Notes, p. 61. 本稿では、*Collected Works of Basil Hall Chamberlain* vol. 1 (Tokyo: Edition Synapse, 2000) 所収の版を参照した。

36 Chamberlain, *A Romanized Japanese Reader* pt. 2—English Translation, p. 57.

37 Hearn, *WLH* vol. 7, p. 63.

に遡ることができることが今回の調査で判明した。この読本は、日本でよく知られた話を、日本語のままローマ字で記した第一部、それらを英訳した第二部、作中にみられる日本語の言葉や表現の注釈をまとめた第三部という三部に分かれているが、ハーンの要約に引用されるのは、この第三部の注釈部分に解説として記された表現である。そこでは、「会う心して」(“*Au kokoro shite*”)という日本語の表現が、“having the heart (i.e. sensation) of meeting”という英語の表現によって説明される³⁵。この箇所は、第二部の英訳版に「彼女は日々、楽しい考えとともに母親に会っていると感じていた」とあり、「会う心して」にあたる箇所は、“[she] felt that she was meeting her mother”という文章の形で訳されている³⁶。日本語の原作の方が「より穏やか」だとするハーンの記述を踏まえると、“felt”という動詞の代わりに“the sensation”や“the heart”という名詞を使った表現が選ばれたのは、修辞上の工夫によると考えられる。だが、それと同時に、これらが人間の感情や感覚と関係のある言葉であることを考えると、“the sensation”や“the heart”は「鏡は女の魂」の諺に通じる表現であるように思われる。ハーンはこの諺を鏡が持ち主の心を映し出すという意味であると説明したが、「松山鏡」でも、娘が鏡を覗くのは、母親に会っていると信じていたからである。鏡が母親や家族と結びつけられていることや、持ち主の心情と連動すると考えられている点で、「博多にて」と「松山鏡」、「鏡と鐘」とには共通する発想が認められる。すなわちハーンが日本の鏡に認めた「美なるもの」とは、鏡に象徴される家庭生活やその幸福な記憶だったのではないだろうか。

4. 無間の鐘の後日談——女性と怒りについて

4-1. 欲に駆られた人びと

「博多にて」と「松山鏡」、「鏡と鐘」とは、鏡が取り結ぶ母と娘の幸福な記憶を取りあげた点が共通する。「博多にて」では、鏡が映し出してきた持ち主の穏やかな家庭生活や、鏡が持ち主の心情と結びついているという発想が「美なるもの」として語られ、その一例として「松山鏡」が引かれた。そこでは、娘が亡き母の形見として鏡を大切にすることが前景化され、母を慕う少女の姿が「いじらしいもの」(“a very piteous thing”)として描き出されている³⁷。

これに対し、「鏡と鐘」とに通底するのは、百姓の妻に対する周囲の無理解であり、彼女が怒りに駆られて死んだことである。ここで再び、「鏡と鐘」とに戻り、百姓の妻を巡る伝説の後日談を考察していく。

以下は、彼女の死を伝える箇所のおのち後に置かれた文章である。

You must know that the last wish or promise of anybody who dies in anger, or performs suicide in anger, is generally supposed to possess a supernatural force.³⁸

ここにおいて、語り手は怒りを抱いて自殺を図った者が、死の間際まで抱いていた約束や願望には超自然的な力があることを語り、百姓の妻が怒りに駆られて死んだことをほのめかす。そして、この直後に次のような後日談を置くことで、語り手は村の混乱を彼女の怒りと結びつけて語ろうとする。

百姓の妻の死後、鏡が鑄造されて立派な鐘が造られた。すると、彼女の遺言の内容を信じた人びとが大金を得ようとして寺にやって来る。僧侶は四六時中撞かれる鐘の音に嫌気がさし、鐘を谷に沈める。この話は、原話に次のように言及されている。

貧鄙(ヒンビ)ノ人。屢々来テカニ任セテ之ヲ撞(ウ)ツ。寺僧之ヲ厭ヒ。遂ニ深溪ニ埋(ウツ)ムト云フ。³⁹

寺に来るのは「貧鄙ノ人」で、彼らは「屢々」、つまり、しきりに寺にやって来ては鐘を撞く。「カニ任セテ之ヲ撞ツ」は、彼らが熱心に鐘を撞く様子を物語っており、安易な方法で大金を求めようとする彼らの欲望がうかがわれる表現である。そして、「貧鄙ノ人」が四六時中鐘を鳴らすため、その音は僧侶の悩みの種となる。僧侶は困り果てた末、鐘を谷に沈めてしまう。この話は、再話で次のように記される。

After the dead woman's mirror had been melted, and the bell had been successfully cast, people remembered the words of that letter. They felt sure that the spirit of the writer would give wealth to the breaker of the bell; and, as soon as the bell had been suspended in the court of the temple, they went in multitude to ring it. With all their might and main they swung the ringing-beam; but the bell proved to be a good bell, and it bravely withstood their assaults. Nevertheless, the people were not easily discouraged. Day after day, at all hours, they continued to ring the bell furiously—caring nothing whatever for the protests of the priests. So the ringing became an affliction; and the priests could not endure it; and they got rid of the bell by rolling it down the hill into a swamp. The swamp

38 Hearn, *W LH* vol. 11, p. 193.

39 石川『夜窓鬼談』上巻、37頁。

40 Hearn, *W LH* vol. 11, pp. 193-194.

41 Hearn, *WLH* vol. 11, p. 196.

was deep, and swallowed it up—and that was the end of the bell.⁴⁰

42 Hearn, *WLH* vol. 11, p. 196.

原話で「貧鄙ノ人」とされた人びとは、再話では一般的な人びとを指す“people”となっている。「貧鄙ノ」という言葉が外されたことにより、鐘を撞きにくる人の対象が拡大される。その結果、鐘を撞きに来るのがどのような人なのかということよりも、欲に駆られる「人びと」の姿が前景化される。原話では、「貧鄙ノ人」の欲望は「屢々来テカニ任セテ之ヲ撞ツ」と簡潔に語られたが、再話では、「人びと」が勢い込んで寺に来る様子(“as soon as”, “in multitude”)、渾身の力を込めて鐘を撞く様子(“With all their might and main they swung the ringing-beam”)、また富に対する執着心(“not easily discouraged”, “Day after day”)など、さまざまな面から描かれる。それと呼応するように、原話で「寺僧之ヲ厭ヒ」とされた箇所も、再話では「苦痛」(“an affliction”)や「僧侶たちの抵抗」(“the protests of the priests”)という表現が見られ、僧侶の困惑の度合いや、何とかして「人びと」をなだめようとする働きかけが行われたことが語られる。

このように、富を求めて寺に通う「人びと」の姿や、それに困惑し、抵抗する僧侶の姿が詳しく描かれることは、再話の特徴である。原話においても「貧鄙ノ人」が富を追求する姿が伝えられたが、再話では、それをより詳しく語ることによって、「人びと」の身勝手に利己的な態度が強調されている。「来る日も来る日も、四六時中、彼らは猛烈な勢いで鐘を鳴らし続けた——僧侶たちが抵抗のために何をしようとも、まったく気かけなかった」(“Day after day, at all hours, they continued to ring the bell furiously—caring nothing whatever for the protests of the priests”)という文章には、富を手に入れることを最優先し、周囲が目に入らなくなった「人びと」の姿がはっきりと表されている。

以上の出来事が直接、百姓の妻の怒りと関わりがあるのかどうかは明示されていないが、少なくとも騒動のきっかけは彼女の死に求めることができるだろう。語り手は、鐘が沼に沈められた後も、百姓の妻の遺言にあやかろうとする者が絶えないことに触れ、そのために「多くの問題(“so much trouble”)が起きた」と語る⁴¹。そして、「そのような人々の一人が梅ケ枝と呼ばれる女性である」(“One of these persons was a woman called Umégaë”)として、梅ケ枝の逸話が紹介される⁴²。本論は無間の鐘の伝説を中心に議論を進めるものだが、伝説の後日談と重なる構造が見られるため、梅ケ枝の話にも触れておきたい。

原話と再話に共通する筋として、次の内容がある。梅ケ枝と梶原

景季が旅をしていた時、景季のために金が必要になった。梅ケ枝は無間の鐘の伝説を思い出し、伝説にならって鐘に見立てた水盤を打ち鳴らして大声で金を求めた。すると、宿に滞在していた別の客が事情を知り、梅ケ枝に金が与えられた。

原話には、宿の客が梅ケ枝に金を与えた理由が、「客有り其〔ノ〕誠心ヲ憐（アハレ）ミ楼上ヨリ金ヲ擲（ナゲウ）ツテ之ニ与（アト）フ」と書かれている⁴³。つまり、客は梅ケ枝の誠実な心に同情し、その心を見込んで梅ケ枝に金を与えたのである。一方、再話では客が梅ケ枝に金を与える箇所が次のように書かれている。

A guest of the inn where the pair were stopping made inquiry as to the cause of the banging and the crying, and, on learning the story of the trouble, actually presented Umégaë with three hundred ryō in gold.⁴⁴

客が梅ケ枝に金を与えた理由について、再話は原話のようにはっきりとは語らない。しかし、「バンバンという音や叫び声」（“the banging and the crying”）という表現や、「問題」（“trouble”）という言葉が用いられているところを見ると、梅ケ枝の祈りがほかの客の注意を引いたことは想像に難くない。実際に、彼女が祈る様子は「彼女は〔水盤を〕壊すまで打ち鳴らした——それと同時に、大声で三百両の金を求めた」（“[she] beat upon it until she broke it—crying out, at the same time, for three hundred pieces of gold”）と語られており、水盤を叩く動作や、祈りと称して大声を上げたことなど、騒々しさが強調されている。

景季のために金を求めた点で、梅ケ枝の祈りには利他的な側面が認められる。しかしながら、なりふり構わずに自分の目的を叶えようとするあまり、周囲への配慮を欠いたところは、無間の鐘の伝説の後日談で僧侶を悩ませた「人びと」の姿を思わせる。宿の客が不審に思うほどまでに水盤を叩き、金を求め続けた梅ケ枝の行為は、欲に駆られた「人びと」が僧侶を困らせ、最終的には鐘を沼に沈めさせたことに通じる。ではなぜ、再話では、このように人びとが欲に駆られる様子が強調されるのだろうか。

ここでもう一度、無間の鐘の伝説に戻りたい。百姓の妻は鏡を寄付したことを悔やんでいたが、それは鏡が家族の思い出の品だからであった。彼女にとって、それは自分の命の一部も同じだと思えるほど大切な品であったが、周囲の人びとはこの事情を汲むこともせず、彼女を身勝手に利己的な人物だと判断した。このことが彼女に羞恥心や怒りを抱かせ、自殺するまで追い詰めたことはすでに触れた。再話では、彼女が怒りを抱いて自殺したことを強調し、安易な方法

43 石川『夜窓鬼談』上巻、37頁。

44 Hearn, *WLH* vol. 11, p. 196.

で大金を求める人びとや、景季のための金策に奔走する梅ヶ枝の姿が描かれる。いずれの場合も、彼らは自分の目的を優先するあまり、周囲への影響を配慮するだけの想像力が欠如しており、結果として、迷惑な事態を引き起こす。再話で重要なのは、これらの問題のそもそものきっかけとして、百姓の妻を位置づけていることである。

5. 「博多にて」から「鏡と鐘と」へ——個人の幸福を守るために

「鏡と鐘と」は社会の目的を達成するために、個人が犠牲を求められたり、抑圧されたりすることの不幸を描いたテキストである。個人の思い出が、集団の利益のために失われることに対するハーンの懸念は「博多にて」にも表されているが、「博多にて」と「鏡と鐘と」に「松山鏡」を加えて検討することで、鏡そのものよりも、むしろ鏡との関係から浮かび上がってくる人間の心に向けて、ハーンの関心が開かれていたことがわかった。

鏡が家族の思い出の品であること、とりわけ母から娘に渡されるものであることは、「松山鏡」と「鏡と鐘と」に共通して見られる設定である。とくに「松山鏡」の要約では、ハーンは時に原作を書き換えながら、鏡が家族の愛情の証であることを念入りに描いた。

鏡に込められた個人的な思いに向かう関心は、「博多にて」の第二節で大量の鏡が失われることに反対するハーンの姿勢に通じる。ハーンは鏡が失われれば、それぞれの鏡にまつわる持ち主の記憶も失われると考えたのである。そして、仏像を造るために大量の鏡が持ち主の記憶とともに失われることを、「大量破壊」という強い言葉で表現した。

「博多にて」に示されたこの考えは、「鏡と鐘と」でさらに踏み込んで展開される。鏡を通じた母子の思い出という「松山鏡」の主眼は、いわば「鏡と鐘と」の前段となっている。「鏡と鐘と」でも、家族の間で受け継がれ、自分も母親から譲り受けた鏡だからこそ、百姓の妻は鏡を愛おしく思い、また手放しがたく思う。この思いが社会に受け入れられないばかりか、身勝手にわがままだと見なされたことが、彼女の悲運であった。彼女は羞恥心と怒りの中で命を絶ち、遺言を通して人びとの利己心を露呈させる。欲に駆られた人びとの行動は僧侶たちを困惑させ、最終的には、せっきく造った鐘を谷底に沈める事態となる。これらの出来事は、百姓の妻の復讐という見方ができるだろう。

「博多にて」や「松山鏡」と「鏡と鐘と」が決定的に異なるのは、厄介ごとを引き起こす存在として女性を位置づけたことである。「博

多にて」および「松山鏡」では、鏡が幸福な家庭生活の象徴であり、それを眺める女性の姿が穏やかな筆致で語られていた。しかし、その鏡を失うと、女性の様子は一転し、直接、間接に関わらず、後世の人びとの欲望を刺激し、周囲に騒動を引き起こしていく。この様子は、「鏡と鐘と」における無間の鐘の伝説の後日談や梅ヶ枝の逸話に確認することができる。

だが、「鏡と鐘と」は単なる女性の復讐譚ではない。百姓の妻は、自分の命も同然だと思っていた家族の思い出を失い、村の中で孤立するという行き詰まった状況に抗うために、彼らに仕返しをしたのだといえる。このように、百姓の妻の事情が描きこまれたことは、「鏡と鐘と」の重要な特徴である。そして、この特徴の背景には、「博多にて」や「松山鏡」で示された個人的な思い出を擁護するハーンの姿勢がある。私的な記憶が個人にとってどれほど重要であるかを示すとともに、社会的な目的のために、その記憶が犠牲にされなければならないことへの懸念が、「鏡と鐘と」では、百姓の妻の悲劇として描かれたのではないだろうか。

